

「幸せが獵犬のように追いかけてくる」

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

このタイトルの由来

20世紀ユダヤ教思想家のA・J・ヘッシェル Abraham Joshua Heschel (1907-1972) を読むよう、私に^{しやうよう}推薦したのは、文芸評論家の富岡幸一郎氏であった。10年ほど前のことである。富岡氏は篤実なキリスト教プロテスタントの信仰者であるが、拙著『天人人間学総説』(1999年)について『仏教タイムズ』紙上で書評して頂いたことが機縁で、交流が始まった。同氏とは、宗教間対話の試みでもある『宗教原理主義を超えて』(2002年)という対談本を共著で出したこともある。

ヘッセルの主な著作は、いずれも森泉弘次氏により翻訳され、教文館から刊行されている。森泉氏には、ヘッセルの生涯と思想について紹介した本があり、それが『幸せが獵犬のように追いかけてくる』(2001年)なのである。本書も同じく教文館から刊行された。教文館はプロテスタント系の出版社であるが、ユダヤ教思想家の本も出しているところが面白い。

それにしても、「幸せが獵犬のように追いかけてくる」とは、なんと心を突き動かす印象深い命名だろうか。我々人間が、幸せを獵犬のように追いかけるのではない。それだったら、幸せのほうに逃げ足が速く、我々はきつと取り逃がしてしまうだろう。しかしそうではない。幸せのほうに、我々を獵犬のように追いかけてくるのである。我々が追いつかれ、獲物のように捕えられてしまうのは時間の問題なのだ。幸せは我々を確実に捕えてくれる。これはなんと、素晴らしい救済の約束ではないか。

森泉氏によるこの本の表題は、ヘッセルが20代の頃、彼の母語であるイディッシュ語で書いた詩集『人間一言い表しえぬ名』の中に出てくる、「神はどこへ行こうとも私を追いかけてくる」という詩句から取られたものだという。人間が神を希求して探し求めるのではなく、神のほうに人間を愛して、聖なる使命を託すために人間を探し求める。神のその人間探求には、実に獵犬のように執拗なものがある。逃げても隠れても神はどこまでも追いかけてくる。それほどまでに神は人間を愛し、祝福したいのである。

肉親愛のような神人関係

だが、幸せといっても、それは苦難や試練とともに到来するものだという暗示があることを忘れてはならない。この思想は、後年の『人は独りではない』(1951年〔邦訳1998年])やその続編『人間を探し求める神』(1955年〔邦訳1998年])において独特のユダヤ教宗哲学として自覚的に展開される。ユダヤ民族の歴史がまさに苦難と試練とともにあり、ヘッセル自身の生涯もまたそうだった。

ポーランド生まれのユダヤ人であった彼は、第二次世界大戦中、ナチスのホロコーストにより母と姉3人を失い、彼自身もゲシュタポに逮捕され、厳寒の国境に放置されて、そこからかろうじて脱出したという経歴を持っている。「猷身的な親の汚れた手、迫害されてきた人たちの五体満足でない身体と生傷だらけの顔に、地上に最後に残された偉大な光明を垣間見ることが出来る」(『人は独りではない』295頁)と彼が述べるとき、おそらくはそのことを前提にしているのだろう。

このような過酷なユダヤ人迫害は、M・ブーバーやE・レヴィ

ナスなど、同時代のユダヤ教思想家の人生や思想にも深刻な影を落としている。しかし、同じユダヤ教の精神的出自を持ちつつも、彼らはヘッセルとは思想的傾向を異にするところがある。ブーバーは開明的で近代的知性を早くから受け入れ、『我と汝』などの著作を通じてヨーロッパの一般的な知識階層に受け入れられてきた。レヴィナスは正統主義ラビ神学に立脚し、フッサールやハイデガーを経由して、『全体性と無限』などで哲学的に堅固であるが晦渋な思想を展開した。このように20世紀のユダヤ教思想家といっても三者三様であるが、彼らはいずれも神との自覚的関わりの中で、それぞれに人生肯定的な宗教的人間学を築き上げてきたという共通性がある。

ヘッセルが個人的に関わりを持ったのは、彼より30歳年長のブーバーであった。彼は神と人間の対話的關係性を強調したが、ヘッセルによれば、そのような関係自体が水くさい、疎遠なもののように思われた。森泉氏の表現を用いれば、彼における神と人間の関係はもっと肉親愛に近い関係である。ヘッセルに、ある学生が「先生にとって神様とはどんな方ですか」と質問したことがある。彼はすかさず、「人間よりずっと親しい関係です。人間とつきあうほうがはるかに難しく骨が折れます」と答えたという。

未曾有の生態学的危機における神人の共働関係

ヘッセルは、人間とは実はそもそも神の臨在、神の近さの内であって、そのことを常に肌で感じつつ、敬虔な思いで生きなければいけないと考えていた。神の関心事は、人間の身体と魂が真に切望するものと合致する。その意味で人生は聖なるものである。この聖なる人生は神人の^{パートナーシップ}共働関係の上に成り立つが、今日まさにこの^{パートナーシップ}共働関係が見失われているのである。

彼は、『神と人間のあいだ』(1959年〔邦訳2004年])の中で、技術文明が人間の驕りのために大変な災禍をもたらす事態を預言的な口調で述べている。今、それを読めば、彼がまるで福島原発事故の深い真相を見越しているかのようでもある。

人類は原子力という禁断の樹の実を食べてしまった。そして自力で楽園を建設しはじめ、この楽園から神を追放しようとした。それが万事順調のように進むかのように見えたまさにそのとき、原発事故の思いがけぬ大惨禍が発生したのだ。ここにおいて、我々の楽園が「火山の頂上に建てられていた」ことが突如として暴露されたのである。

けれども、我々は希望を失うには当たらない。究極の苦難と試練の中にこそ、神の臨在が痛切に感じられ、^{パートナー}共働者としての神を身近に見出すことができる。神は人間を見捨てない。それどころか、神は我々がこの世に正義と平和と聖性を達成するため、肉親のように見守ってくれる。人間は神と共にあることで幸せにならなければならない。そして、その幸せは獵犬のように我々を追いかけてくるというのだ。なんと心強い慰めであり励ましであろうか。

我々はそれゆえ、どんなに危機の中にあっても、神の臨在の下に生きていることを自覚しつつ、直面する難問をねばり強く解決していくことが求められる。これが今日の時代におけるヘッセルの力強い信仰的メッセージなのである。